

コギトとデカルトの循環

岩佐宣明(愛知学院大学)

本発表の目的は、デカルト形而上学においてコギトが果たす役割を再考することにより、いわゆるデカルトの循環を解決に導く一つの道筋を提示することである。コギト発見の意義を、内的体験の直接的意識に裏付けられた内省的認識の特権的な確実性の発見、と見定めた上で、誠実なる神による保証を要するのは過去の明証性のみ、現に明証的に認識されている事柄は万能の欺き手という仮定の下でさえ完全に確実である、とするもつとも古典的な循環解決を支持したい。

デカルト自身が第二答弁で与えた循環をめぐる公式釈明のもつとも自然な読み方であるにもかかわらず、この古典的解決に満足しない解釈者が後を絶たない最大の理由は、第一省察で遂行される懐疑の深度が、この解決をまったく不可能にしているように思われるからである。現に第一省察では、懐疑はたとえば「 $2+3=5$ 」といった、きわめて単純な明証的認識にさえ及んでいる。単純な認識は記憶とは無縁である以上、第一省察で提示される最強の懐疑的仮定の脅威は、過ぎ去った明証性以上にはけっして及ばない、などと読むわけにはいかない。

とはいえ、懐疑の深度にテキストによって齟齬があるように読めるのは、解釈者の力量以前に、デカルト自身の論述の不十分さでもあり、この点、デカルト本人が問題の全容をつねに完全に把握していたわけではない、と発表者は考えている。循環問題の本質はそれゆえ、第一省察のデカルトと第二答弁のデカルト、後者はまた第三省察以降の神の存在証明に当たり、「それは明証的だ」「明晰判明だ」の一言で躊躇なく前に進んでいくデカルトでもあるが、これら両者のあまりの隔たりゆえに別人格とさえ映る二人のデカルトを、説得的に一つにつなぎ合わせるミッシングリンクは何か、という問いなのである。

本発表はこれに対し、そのミッシングリンクはまさにコギトであると、すなわち、同一の懐疑的仮定に対して第一省察と第三省察以降との間に見られる、あの分裂とも言うべき態度変更を整合的に説明し、理解可能にするのは、第二省察で哲学の第一原理として発見されるコギトにほかならない、と提案する。

この提案にデカルト自身が驚くとは思われない。現に彼自身が第三省察冒頭において、コギトからの明証性の一般的規則の導出という形で、誠実なる神の存在証明に先立ち、その証明に首尾よく着手するための準備として、コギトがそれ自身の確実性に基づいてそれ以外の認識の信頼性を一部回復する、という絵図を描こうとしているのである。ただ、そのために彼が具体的に採った方策、すなわち、確実性の根拠の共有というロジックでコギトの確実性を他の認識にも拡張する、という方策は、彼の意図とはむしろ正反対に、コギトの確実性の根拠を完全に雲らせ、コギトをさえ第一省察の懐疑に再び巻き込む、という結果にしかなっていない。模索すべきは、コギトの特権的な確実性を殺すのではなく、それを存分に活かす形で、第三省察冒頭でのデカルトの意図を拾い上げる道である。

ではまず、言うところのコギトの特権性とは何か。発表者の考えでは、それは内的体験を対象とするあらゆる内省にその基礎を提供する、意識の直接性に由来する。直接性というこの聖域に守られたものとして、コギトはあらゆる法外な懐疑に抗して最初に発見される唯一の確実性である。そしてコギト以降、順序正

しく哲学する者は、直接的に認識可能な内なるものと、観念媒介的のみ認識可能な外なるものという対比の下、もはや前者に定位してしか何事も主張しない。コギトがもたらすこの内への向け変え、この内省的転回こそ、すでにそれ自身において、万能の欺き手という最強の懐疑的仮定の威力にある決定的な制限をもたらす当のものなのである。

繰り返せば、デカルトが第二答弁で行ったのは、現に明証的な認識を一括して懐疑から放免するという、第一省察の視座からすれば信じがたい釈明だった。しかし、その釈明が展開される文脈を、第三省察冒頭同様、コギトを獲得済の成果とした上で次なる課題に乗り出そうとする場面に設定してこれを読み直してみると、コギトがもたらす内省的転回が、なぜ万能の欺き手という最強の懐疑的仮定の威力をそぎ落とすことになるのか、それを探る上での重要なヒントが、そこには多く散りばめられている。

中でも特筆すべきは、(1) 現に明証的な認識を疑うことはできない、という記述的主張、さらに(2) 現に明証的な認識を疑うべき理由は何もない、という規範的主張、そして(3) 現に明証的な認識も絶対的に言えば偽でありうる、という可能性の容認、の三点である。これら三点から浮かび上がってくるのは、現に明証的な認識も絶対的に言えば偽でありうるが、私がそれを疑いえない以上、この可能性は私が当の認識を疑うべき理由を何も与えない、そしてまたそうである以上、「私にとってそれが何なのでしょうか？」(AT.VII, p.145, l.1)とする議論である。現に明証的な認識を前にして、万能の欺き手という仮定は不可能になるのではなく、無意味になるのである。

にしても、デカルトはいかにして、「疑いえない」から「疑うべき理由がない」へと到達するのか。行為の理由をめぐる哲学的議論の中でしばしば言われてきたように、当為は可能を含意するからか。しかしデカルト解釈史の中ではむしろ、「疑いえない」から「疑うべき理由がない」は帰結しない、その距離を埋めうるのはただ神の誠実だけである、とする見解のほうが優勢である。発表者の考えでは、デカルトの立場はそのいずれでもない。彼はたしかに、「疑いえない」から「疑うべき理由がない」へと到るのに神の誠実に俟つ必要はないと考えたが、それはしかし、前者が後者を論理的に含意するからではない。自分が何かを疑いえないことを内省によって確実に理解すれば、それを疑うことでしか達成されえない目的を自分が欲することもすべてなくなる、ということ自体を自身の一つの体験として、内省によって確実に理解する。デカルトが「疑いえない」から「疑うべき理由がない」へと到達するのは、こうした幾重もの内省に基づく徹底的に経験的な考察の結果にほかならない。

以上のように、循環をめぐるデカルトの釈明の説得力はひとえに、明証的認識を疑うことができないとはどのようなことであるのかを、明証的認識が現に成立しているその時点において直接的かつ体験的に理解する内省の働きに由来する。それゆえ明証性が記憶の中へと過ぎ去ると、絶対的虚偽を画策する欺き手の可能性が、再び何か重要なものであるかのごとく力を取り戻すことになる。さらにまた、私の精神の視線が私の内なる体験を素通りして私の外なる事物に向っているかぎり、つまりコギトがもたらす内省的転回と私が無縁であるかぎり、要するに第一省察の素朴な精神的態度に私がとどまっているかぎり、絶対的虚偽の可能性をチラつかせて私を脅かす欺き手の幻影は消えない。この幻影を消し去るために、私はまず私自身を知らねばならない。コギトはこのわずかだが、しかし決定的な一歩である。